

# Techno-Ocean News



November 2001

No.2



## 海洋科学技術センター創立30周年を迎えて

— 21世紀は「地球と生命の時代」 —

海洋科学技術センター 理事長 平野 拓也



### 1) 海洋科学技術センター30年間の道のり

海洋科学技術センターは、1971年10月1日に設置されて以来、本年10月をもちまして、30周年を迎えることができました。これも、ひとえに国民のご理解と関係各位のご支援、ご協力、ご尽力の賜物と強く認識致している次第です。当センターはこの30年間に、以下の3段階を経て発展してまいりました。

#### ○1970年代：模索と基盤づくりの時代

当センターが発足した1970年代は、海洋科学という新たな研究ジャンルの基礎を固める地道な基盤づくりの時代でした。横須賀に本部の施設や設備を建設するとともに、海中居住実験や海中作業技術など沿岸での研究に取り組む一方、来るべき深海研究の時代に向けて有人潜水船「しんかい2000」の開発に着手しました。

#### ○1980年代：深海研究・海洋研究の幕開け

「しんかい2000」、海洋観測船「かいよう」、無人探査機「ドルフィン3K」などの海洋調査機器が開発され、これらを用いた深海研究や海洋研究において重要な発見を重ね、海洋科学への取組みも始まりました。

#### ○1990年代：大洋の時代

「しんかい6500」、無人探査機「かいこう」、深海調査研究船「かいらい」、海洋観測船「みらい」などを開発、建造するとともに、未踏の先端科学領域に挑む「フロンティア研究」をスタートさせ、深海・海洋調査の分野で世界最先端のレベルに到達しました。これにより、地球全体を視野に入れたグローバルな海洋研究にも取り組むことができるようになりました。



未知の海洋での調査が期待される  
深海超大型探査機「うらしま」

### 2) 21世紀へ向けた展望

21世紀は、我が国が真の海洋国家として存在感を示すべき時代となるように思いますが、そのためには地球環境問題の解決やエネルギーや食料資源の確保など

の今日の人類共通の課題に海洋の研究を通して積極的に貢献することが最も捷徑であり、国家戦略としての海洋科学技術の意義は、まさにここにあると言ってもよろしかと思います。当センターでは、これまでの30年間の土台に、今後も更に深海巡航探査機「うらしま」、超高速並列計算機システム「地球シミュレーター」や深海地球探査船「ちきゅう」なども戦列に加え、21世紀を「地球と生命の時代」と捉えて、海と地球と生命の織り成す「奇跡のバランス」の理解を究極目的とした海洋研究を世界の人々と共に進め、その成果を積極的に公開して国民と社会に貢献してまいりたいと思っております。また、究極目的の達成のためには、科学レベルの一層の向上とともに、技術の一層の発展も不可欠であり、常に最先端の技術の開発・導入を図り、海洋にチャレンジし続けていくつもりです。

### 3) テクノオーシャンへの期待

テクノオーシャンは、海洋の分野で科学と技術を繋ぐ、我が国と海外を繋ぐ、そして国民と科学者、技術者を繋ぐ我が国最大規模の催しと認識しており、当センターも日頃の活動を広く知って頂く絶好の機会として展示や船舶の公開、研究成果の発表をさせて頂いております。海に係わりの深い神戸という地の利を得て、より多くの人々に海の不思議さ、素晴らしさを実際に体験して頂いて理解を深めて頂ければ、そして海に人生をかける青少年が一人でも生まれるきっかけになればと願っています。また、私達も、これをきっかけに、より多くの国々の人々と、より幅広い分野の専門家と、そして国民の皆様とめぐりあい、ネットワークを作ることができればとも願っております。

#### 【連絡先】

住所：〒237-0061 神奈川県横須賀市夏島町2-15

電話番号：0468(66)3811(代)

URL：<http://www.jamstec.go.jp>



## 日本海洋学会 創立60周年を迎えて

日本海洋学会 会長 角 哲 静男

### 1) 日本海洋学会の60年

日本海洋学会は、海洋の物理、化学、生物、地学などすべての分野の科学の進歩、普及を図るため、1941年（昭和16年）1月17日に生まれた。その創立60周年記念式典が本年9月24日に静岡で行われた。

誕生の年に第2次世界大戦に突入したが、その2年後、会員数は1,200名を超えていた。しかし、敗戦。その影響はあまりにも大きく、戦後8年経った1953年でも会員数は、423名であった。その後の会員数の推移は、60年代倍増、70年代5割増、1980年に1,600名に達したものの80年代は低迷、90年代は34%の増加、そして2001年7月には2,271名となった。この増加の要因としては、1回目は、高度経済成長時代の安定感が海への関心を高めたこともあろうが、皮肉にもむしろ、その歪みから起こった沿岸域の環境問題にもあった。90年代の2回目は、地球環境に対する関心からであろう。少なくとも、日本国民が海の科学の発展を考えた結果でなかったことだけは確かである。なぜなら、相変わらず、日本の国立大学に海洋学部や海洋学科が一つもないからである。因みに、韓国では12、オーストラリアで6、米国では約40の大学に海洋学科がある。

### 2) 創立60周年記念事業

本年9月24日の記念式典では、会長式辞の後、文部科学省はじめ海洋関係機関からの祝辞があり、海洋の研究や観測、本会の活動に力を貸してくれた団体、船舶、個人に感謝状や表彰状が贈られた。創立以来の会員2名も特に表彰された。その後、韓国、オーストラリア、米国の海洋学会長による講演があり、文字通り、海が世界をつなぐことになった。そして祝賀会、共に歩む海洋関係諸学会より、メッセージが寄せられた。翌25日は、午前には先達からの後輩への助言、午後は、36歳未満の者が受賞する岡田賞をこの10年以内に得た第一線研究者による提言があった。22日には地元の会員が企画する市民講演会も行われた。

50周年のとき、「海と地球環境 海洋学の最前線」を東大出版会より刊行し（定価4,400円）、すでに1万部以上印刷し、好評を得ている。それで、60周年記念事業の一環として日本海洋学会編「海と環境 海が変わると地球が変わる」が講談社より刊行された（定価2,800円）。前者は、主に現在の海の科学の最先端をわかり

やすく解説したのに対し、これは、過去、現在、未来という時間軸に沿って、地球環境変化に関わる海の問題を取り上げている。いずれも縦書きの本であり、大学初年級あるいは高校生でも理解できるように配慮して書いている。多くの方々に読んでいただきたいと思う。

また本会では、英文誌の「Journal of Oceanography」と和文誌「海の研究」を隔月で発行しているが、来年第1号は記念号となる。英文誌は、2号にわたって世界の研究者が執筆して西太平洋域を中心とする海洋学のレビュー論文で飾られる。和文誌には、日本の海洋学の各分野、各研究機関の十年の歩みが掲載される。日本海洋学会事務局に申し込めば、この号だけ1部1,500円で購入出来るが、学会に入会すれば、年会費8,000円で、これらすべてが配布されるほか、学会で講演するなどの活動ができる。

本会は、国際科学会議（ICSU）の海洋研究科学委員会（SCOR）と連動した国際的活動も行っており、21世紀の世界の海洋学の進歩発展にも邁進している。その一環として、来年10月には、札幌で32年ぶりにSCOR総会が開かれることになっている。

#### 【連絡先】

住所：〒164-0014 中野区南台1-6-14 MKビル202  
電話番号：03(3377)3951  
URL：<http://www2.ori.u-tokyo.ac.jp/osj/kaiyo.html>

## JSFS (社)日本水産学会 創立70周年を迎えて

社日本水産学会 会長 渡邊 武

### 1) 日本水産学会70年の歩み

社日本水産学会は、新千年紀の当初に多数のご来賓をお迎えして、創立70周年記念式典を挙行することができました。また、式典後のレセプションには天皇・皇后両陛下をお迎えすることができました。これも偏に皆様方の平素からのご支援・ご協力の賜と、深く感謝申し上げます。

日本水産学会は、1932年（昭和7年）に東京水産大学の前身であります水産講習所の伊谷市次郎先生によって創立され、まもなく70周年を迎えようとしておりますが、諸先輩方の努力や関連業界・諸機関のご支援により約4,500名の会員を擁する世界でも有数の水産と海洋の科学に関する学会に発展しました。爾来、日本水産学会は水産・海洋の科学に関する諸分野において終始先導的な役割を果たし、社会の発展に大きく寄与してきたことは周知のとおりです。しかし、一方では水産学の進歩は同時に社会に対して負の遺産をのこしたことも事実であります。

### 2) 21世紀における水産・海洋学の展望

この21世紀には人口増加による食糧危機や地球環境の



劣悪化など多くの問題に直面することが予測されております。水産・海洋の科学は、これまで主に動植物タンパク質の安定供給を意図した基礎的、応用的研究を展開してきましたが、21世紀においては人類の繁栄と幸福を保障するさらに新たな研究努力が求められております。特に、水圏食資源生物の資源管理や増養殖、高度利用などの自然科学的側面の進展を図るとともに、漁業管理や資源配分・流通、環境保全などの社会科学的側面の展開が不可欠と考えております。さらに、水圏を地球規模で共同して保全する意識の育成も急務であります。

### 3) 創立70周年国際シンポジウムと記念出版

このような観点から、日本水産学会は、記念事業の一環として創立70周年記念国際シンポジウム「新世紀における水産・海洋科学への期待と展望」を本年10月1-5日、パシフィコ横浜において開催し、内外研究者の優れた識見に接するとともに、率直な議論を通じて、21世紀における水圏に関わる諸科学をどのように展開させるべきかを



を探ることにしました。国内外の研究者千余名(外国からの出席者約300名)の参加を得て、9つのセッションに分かれて活発な議論がたたかわされました。記念事業としては、そのほか記念出版「**畜産水産学用語辞典**」を刊行しました。

#### おわりに

日本水産学会はこれからも引き続き水産学・海洋学の諸分野に亘って、その進歩と普及に専心努力するとともに学会活動の国際化をいっそう進める所存であります。今後とも変わらぬご支援の程お願い申し上げます。

#### 【連絡先】

住所：〒108-8477 東京都港区南港4丁目5-7  
 東京水産大学内  
 電話番号：03(3471)2165  
 URL：<http://www.soc.nii.ac.jp/jfs/index.html>



## AMSTEL 海洋理工学会の最近の活動と今後の方向

海洋理工学会 会長 竹内 俱佳

### 1) 海洋理工学会の趣意と経緯

海洋科学は物理・化学・生物などあらゆる自然科学を含む地球規模の科学であり、調査研究対象とする時空間スケールは広く、また人間の近づくことの困難な自然であります。従って、精度の高い自律的計測技術と密度の高い観測が要求されます。このため更なる海洋科学の発展のためには先端技術を導入した海洋観測技

術が必要不可欠であり、新しい観測技術の開発は海洋科学の大きな発展につながって行きます。しかるに我が国の海洋研究は自然科学的研究と観測・計測技術を中心とした工学的研究との間での交流が少なく、海洋研究への先端技術の導入が遅れがちでありました。



本報記者撮影

このような背景を踏まえて、海洋研究分野における科学と工学との交流をはかり、学際領域の研究推進の場として1989年4月海洋工学コンファレンス(Advanced Marine Technology Conference: AMTEC)が発足しました。

活動としては、春と秋の年2回の海洋先端技術に関するシンポジウムの開催並びにこの内容の論文集の出版でありました。これをさらに発展させ対外的に活動範囲を拡大して行くために、1994年4月海洋理工学会(Advanced Marine Science and Technology Society: AMSTEC)として組織変えし、以来、春・秋のシンポジウムのみならず会員による一般講演、社会的貢献を目的とした公開講座の開催、学会誌の刊行、業績賞、論文賞の授与などを定期的に実施しています。会員の専門分野は海洋物理、化学、生物、観測・計測技術等多岐にわたり、官、学、業の研究者のみならず、企業の技術者・研究者の参加を得ています。

### 2) 最近の活動と目標

最近2年間のシンポジウムは以下のようになっています。

2000年春季	北極の海を測る —北極圏氷海域における科学観測の現状と将来— 2000年5月18日、東京、参加者 約80名
2000年秋季	海洋の可視化 2000年10月、東京、参加者 約70名
2001年春季	海洋情報技術(Marine IT) —モバイル技術を活用した海洋データの伝送— 2001年5月17日、東京、参加者 約70名
2001年秋季	深海に眠るメタンハイドロレート —夢の天然ガス資源開発への挑戦— 2001年10月17日、東京、参加者 約250名

今年は社会的に関心の深い情報技術の海洋分野での利用法について春のシンポジウムで取り上げ、秋のシンポジウムでは海洋から得られる最大のエネルギー資源と言われるメタンハイドロレートの開発について取り上げました。本会は学術団体として21世紀の海洋科学分野の研究者と海洋に関心のある技術者・研究者に先端技術交流と研究成果の発表の広く開かれた場を用意し、海洋科学と関連技術の更なる発展を通して海洋環境の正しい理解と海洋利用に貢献します。

#### 【連絡先】

住所：〒424-8610 静岡県清水市折戸3-20-1  
 東海大学海洋学部地球環境工学科内  
 電話番号：0543(37)0917  
 URL：<http://www.scc.u-tokai.ac.jp/~senga/>

## トピックス

### 暮らしを海と世界に結ぶ「みなとづくり女性ネットワーク」

昨年末に運輸省(現:国土交通省)港湾局において「新世紀港湾ビジョン」が策定されました。このビジョンのタイトルは「暮らしを海と世界に結ぶみなとビジョン」、副題が「国と地域のパートナーシップによるみなとづくり」となっています。これは、人々の暮らしと「みなと」との関わりに重点を置くとともに、国主導のみならず国と地域との取り組みによって、よりよいみなととしていこうというものです。

このような動きのなかで各地域の特徴を活かしたみなとを実現するためには、それぞれの地域の方々の意見、とりわけ、暮らしに関わりの深い女性の意見を取り入れることが重要だと考え、「みなと」に関心がある女性が全国的なネットワークを組み、行政機関や企業、市民のなどとパートナーシップをとり、みなとについて学習するとともに、環境、安全、教育、福祉、文化など女性の視点で、魅力あるみなとづくりに貢献することを目的とし、魅力ある地域のみなとづくりを推進していこうと考えています。

平成13年4月21日に静岡県清水市において第1回設立フォーラムを開催し全国から17名の参加を得て設立しました。9月には第2回目フォーラムを富山県新湊市で46名の参加を得て「協働・協創」をテーマに「みなと」のケーススタディを行いました。発足間もない小さな組織ですが、今後、より多くの人々の賛同者が得られるように活動したいと思っています。



東 恵子  
東海大学短期大学部助教授

## 「テクノオーシャン2002」国際シンポジウム 論文募集のご案内

2002(平成14年)11月20日(水)～22日(金)、神戸国際展示場(神戸ポートアイランド内)にて第9回「テクノオーシャン2002」国際シンポジウムを開催するにあたり、海洋の科学技術に関する幅広いテーマの論文を募集します。

①公用言語:英語

②論文要旨(アブストラクト)提出要領

言語:英語が望ましい(日本語でも可)

受付方法:1) インターネット(On-line)

URL <http://www.techno-ocean.com>

2) 郵送

内容:題名、著者名、所属、所在地、要旨(英語で400words程度、日本語で2,000字程度、A4用紙1枚)

提出期限:2002年4月15日(月)

◎詳細のご案内はホームページ上に掲載されていますのでご覧ください。

### 【Important Dates】

アブストラクト締切	2002年4月15日(月)
採否通知	2002年5月中旬
本論文締切	2002年9月20日(金)
テクノオーシャン2002	2002年11月20日(水)～22日(金)

## テクノオーシャン・ネットワーク(TON)のWebsite:[www.techno-ocean.com](http://www.techno-ocean.com) 開設!

TON独自のホームページを開設しました。まさにテクノオーシャン“どっと込む”。海洋関係の多くの人と情報がどっと流れ込んで、相互に交流しあい、外部へ360度発信していくという機能を表現したアドレス。本誌ともども、このホームページを情報交流ツールとして大いに活用ください。なお、「Techno-Ocean2002」のWebsiteへもこのホームページを通じてアクセスできます。



### テクノオーシャン・ネットワークのご紹介



## 各学会の記念大会の情報をお寄せ下さい

この「Techno-Ocean News」は、専門分野、業種の別を問わず、海洋関係者の横断的な情報交流・コミュニケーションツールとして発表しています。

本誌面では、各学会、団体の講演会・セミナー開催情報あるいはトピックス的情報などをご紹介して、掲示板の役割も持たせたいと考えております。

そこで、読者の皆様から積極的な情報提供をお待ちしております。ご連絡はご遠慮なく右記事務局まで。

### Techno-Ocean News No.2

2001年11月発行(年4回)

発行 テクノオーシャン・ネットワーク

〒650-0046 神戸市中央区港島中町6丁目11-1

(財)神戸国際観光コンベンション協会内

☎078-303-7516 ☎078-302-1870

URL: <http://www.techno-ocean.com>

e-mail: [techno-ocean@kcva.or.jp](mailto:techno-ocean@kcva.or.jp)

ロゴ&表紙ヘッダーデザイン: 東 恵子(東海大学短期大学部助教授)